比較文学への誘い

小田桐　弘子

福永武彦先生は私に「比較文学研究」への扉を開いてくださった恩師である。英文科の三年生の時、「十九・二十世紀フランス文学」という講義を受講した。その頃、学習院大学の文学部では他学科の講義を受けることが、義務化されていた。二年生までに履修した第二語学により、専門科目を選択するのが普通であった。当時『草の花』を発表されたばかりの、作家福永武彦氏は学生たちにとり、輝かしい存在であった。英文科の学生たちは、積極的に履修したのだけれど、アメリカ嫌いの先生はどういうわけか、英文科学生はほとんど落とされるという噂があり、みな恐る恐る受講していた。

N・R・F・の新しい文学活動など、興味深い内容のほかに、私にとり忘れがたく、もっとも印象的であったのは、ボードレールのエドガー・アラン・ポー論のことだった。アメリカ嫌いでも、よい作品・作家はちゃんと認めて、正当に評価されるのだ、など幼い判断で安心した。これこそ「比較文学」というジャンルで古い伝統的フランス文学研究史の中に位置づけられているという、きわめて刺激的なものであった。学期末には倖にも、落とされず「優」ではなかったけれど、「良」の成績を頂き、安堵した。その後福永先生の「ボードレール」の演習に聴講（というより、盗講）したことが、のちに修士論文をかくときに、大変多くの方向を示唆してくれた。短大国文科や小郡時代の学生たちで、単位取得のためでなく、関心があるから、正式履修届をしなくても、参加する風潮があった。

昨今、このような空気がまったくみられず、寂しい気がする。

「比較文学」は「若くて美しい学問」とフランスの比較文学研究者によりいわれている。確かに、アカデミスムの世界に誕生したのは、一八二七年パリ大学ソルボンヌでA. F. Villemainが初めてLittérature Comparéという名称で講義をはじめた、というような「比較文学研究発生史」に関しては、『比較文学』①に詳しい。

英文科学生として、その頃の「比較文学」についての認識は、少なくても二国間の文学・文化の交流を研究する文学研究上の分野、あるいは文学における国際関係の研究というふうなものであった。二年生の半ば頃から、卒論作成が意識にはいり、読書がはじまっていた。偶然に手にしたHenry Jamesの小品が気になり、*Daisy Miller, Ineternational Episode*をよみだすうちに、Henry Jamesの描く世界に関心が動いた。ヘンリー・ジェームスは現代においても、丸谷才一氏の近作『輝く日の宮』(二〇〇三年、講談社)の中で女主人公は日本近世文学を専門としていながら、H. JamesのTurn of The Screwを論じている。小説方法論を考える上に、今尚、新しい問題作家である。ただし、二十代の私をとらえたのは、小説構造論・手法論ではなく、アメリカ生まれのHenry Jamesが作品で追求している、ヨーロッパにおけるアメリカ人たち、いいかえると、伝統文化対アメリカ文化の諸問題であった。*Daisy Miller*のなかでスイスのレマン湖をみおろす観光地でヨーロッパの伝統や文化に夢中になっている姉に対して、幼い弟が〝I like Aemerican candies〟ヨーロッパには本当のキャンデイはない、早くアメリカにかえりたいなどと言いはって、ホームシックをせいいっぱい主張する場面がある。このような文化論というには、やや幼稚なといえる箇所が私の内部において、アメリカvsヨーロッパに目が開かれていくプロセスになっていったのであろう。*The Portrait of A Lady*の総合的作品研究を選んで、一行一行、meaning between the lines「行間の意味」にも、目を配り読み込んでいけたのは、当時翻訳がされていなかったことが幸いしたといえよう。それにしても、この小説の冒頭の延々と続く、広大そうな自然を背景とした、英国の本物のマンションや、いわゆるEnglish tea timeの描写には、

想像力を必要とした。すでに映画でみていた―と思う―「嵐ヶ丘」や「ジェーン・エア」の風景で補ったのであろうが、English tea time の風習は長く私の関心をそそり、滝口明子さんの英国の紅茶文化研究についての数著②は、わたくしの異文化接触研究への興味を続けさせていただいている。小郡時代「比較文化論」の授業形態としては、平川教授が日本文化と英米文化学科の二学科を一教室にまとめて行なっていた。ところがある時期―二・三年この入学者数が多くて、一つの教室で収容できず、英米文化学科の「比較文化論」は私が担当した。テクストには今や、比較文学の古典的名著になっている、後述するアール・マイナー教授の *Japanese Tradition in British and American Literature* を選んだ。この著書に記されている岡倉天心の「茶の本」についてふれながら、講義の中で滝口さんの著書の内容から、英国の tea time のあれこれについて紹介したところ、一人の学生が卒論に選び優れた論文をまとめてくれた。

学習院大学の英文科を終えて、約十年が過ぎてから、上智大学大学院にいれていただいた。福永先生の講義で、フランス文学史を先生は語られながら、若き日、戦争中のこと、中村真一郎氏や加藤周一氏などと新古今和歌集によみふけったことなどにも、ふれられた。中村真一郎は多くの著書のなかでもこのことなどを、度々かかれていて、のちにおおくのご教示をいただいた。さて、大学終了後、病気を友にするような生活の中で、大学院進学を決めた。病気療養中の私がもっとも魅かれたのは和泉式部の和歌であった。福永先生や中村真一郎氏が王朝和歌とフランス象徴派の共通性を語られていることと、重ねて考えるようになっていた。

大学院進学のためには、二〇〇四年の昨今とことなり、一九六八年の私の受験の頃には、外国語が免除される社会人入学という制度もなく、とにかく第一と第二外国語の試験勉強のため、工夫した。それは外国人の日本研究論文を読むことであった。受験勉強のための時間の有効利用という目的ではじめた英訳日本文学、フランス語訳日本文学、関連論文など、かなり読み、なかなか面白く今、思うと比較文化論のテクスト精読の役割をはたしてくれた。

大学院に入るためには、「研究計画書」を提出する必要があり、迷わずに、「和泉式部の和歌とフランス象徴派の比較研究－ボードレールを中心に－」とした。それにしても、十年以上前にききかじった程度に読んだ、ボードレールでは到底充分ではないし、翻訳や研究レヴェルでも進んでいるはずの現在の日本におけるボードレールの授業に参加したいと願った。好運にも大学院進学にあたり、第一志望であったけれどあきらめた東京大学駒場の比較文学・比較文化の芳賀徹先生が教養学科のフランス科の演習で「フランス象徴派」の詩をとりあげることになっているということを知らされた。早速、知人を介してこのセミナー・クラスにいれていただいた。当時のセミナーメイトには、現在東京女子大に所属している大久保喬樹さんがいらした。フランス政府留学生試験に合格して、この秋から出かけることになっているという大久保さんは、ランボーの〝Illumination〟を読んでいるときにも、先生の言葉の解釈にも、ご自分の言語解釈による判断を、しっかりと主張されるなど、学ぶことが多々あった。また、ボードレールの「旅への誘い」を担当した女子学生の方は Texte Critique に加えて、この詩にデュパルク(Henri Fouques Duparc)が作曲したものをきかせるなど、大変楽しいセミナーであった。このセミナーに出席させていただいたおかげで、象徴詩をとりあげるためには、どういう文献があるのか、今後勉強を続けていく方向がようやくみえてきた。その後も芳賀徹先生には日本国内はもちろん、アメリカ在住の折、プリンストンで、また国際比較文学会が開かれたヨーロッパの各地で、楽しい歓談のうちにも、ご指導頂いた。このことは私の比較文学研究の道筋を確かなものにしていった。

このようにして修士論文をまとめていくうちに、比較文学研究の方法についても考えることが内発的にうまれてきた。修士論文の一部を加筆訂正して、本学の人文学研究所紀要『人文学研究』第2輯（一九九九年発行）に「和泉式部私論－象徴性からみて－」と題して掲載されているので、ここでは内容については省略したい。

さて、修士過程一年目に、二年後に発足が決まっている博士過程への進学を生涯の恩師の笹淵友一先生からご推

挙いただいた。その時には先述した、東大でのセミナー経験に助けられつつ、すでに先生のご指導を受けて、和泉式部研究をすすめる一方で、横光利一研究を志していた。その時代まで、比較文学研究では影響関係のない、いわゆる東西文化の比較のようなことは、学界的に認知されていなかった。したがって、和泉式部の和歌とフランス象徴派の比較などでは、学会発表など認めてもらえない、という先生のお勧めがあった。このような状況のなかで、比較文学研究の対象を選択する際に、中学生時代に初めて読んだ、『旅愁』が浮かんできたのである。

ここで比較文学研究についてふりかえってみる。すでに、研究史的には過去のものとなっているが、作品間の国際的受容関係・影響関係の実証のみを比較文学研究として、認知するとする時代が長く続いていた。この方法論はフランス派と呼ばれていたが、一九五五年頃からアメリカ派と呼ばれる方法論が認められてきた。フランス派は Influence Study とか Reception Study と称され、アメリカ派は Parallel Study といわれている。

したがって、「和泉式部の和歌とフランス象徴派の比較研究」は「対比研究」というべきであろう。和泉式部の和歌が有している象徴性については、すでに大正時代に与謝野晶子③により、言及されていることをしり、私の仮説を進展させてみようという気持ちを前向きにしてくれた。国際比較文学会世界大会の研究状況では、私が関与した一九七五年以降、確実に Parallel Study がふえてきているし、必然的に発展しているといえる。アール・マイナー教授（二〇〇四年四月逝去、プリンストン大学名誉教授）と私の共同研究による英訳『猿蓑集』も日本古典文学必携 *The Princeton Companion to Classical Japanese Literature* もともに、東西文学・文化の共通項に関心をいだき、また違いの分析などを思考する自然発生的な興味がなければ成立しなかった、といえる。対比研究もおこるべくして、盛んになった方法である。それでは、ただ何となく、関心が生じたから、対比するので研究として、認知されるだろうか。そうではなく、我が恩師笹淵友一先生のご著書『浪漫主義文学研究』にみられるように、ヨーロッパ文学において、浪漫主義として主張され、読まれている浪漫主義の要素を歴史的・客観的に分析して、それらを物

尺として、明治浪漫主義文学にあててみる。日本古典からくる伝統的要素と、進んで積極的にヨーロッパ伝来のイズムをほとんど模倣したり、何とか真似て、ロマンティックにしたてあげている、明治の若き作家たちの姿が彷彿とされてきて、近代日本文学研究の実体が比較文学研究の方法により、理論的・体系的に明らかにされたものである。この著書はすでに近代文学研究としては、古典的名著で、私も修士論文作成にあたり、師の方法によった。フランス象徴派のボードレールの「あほう鳥」や「照応（Correspondances）」にみられる象徴性をよみとり、ボードレールのサンボリスムについて考察した。この過程で興味ふかく実証できたことがある。拙論は先述したように、対比研究のジャンルにはいるはずであるが、テクスト分析に際して、ボードレールの「あほう鳥」をとりあげた。この詩の誕生にあたり、〈影響〉〈受容〉の要素が碩学阿部良雄氏の『悪の華』に指摘されている。簡単に述べると、この「あほう鳥」の主題は英語圏における象徴主義的概念をもつ詩人S・T・コールリッジの「老水夫行」（*The Ancient Mariner*）の主題からの影響という説があるとのことである。④拙論作成のための作品理解において東西対比研究と、フランス派といわれる「受容・影響研究」が同時に有効な方法であった、といえる。

修士過程を終えて、博士過程に進級した。先述したように、すでに横光利一研究の基礎になる外国作家などのいわゆる頻度数調査を修士二年次の夏休みなど、また和泉式部研究の合間に気分転換のための機械的作業、と軽い認識のもとにとりかかっていた。すでに「論文の計画概要とその認可申請」を作成し、提出していた。「申請書」には「論文の主題」は「横光利一研究―比較文学の手法による―」（仮題）としていた。主題とする問題点として「戦前の『文学の神様』から、戦後一挙に反動作家の汚名のうちに死んだ作家横光利一の正当な評価が、戦後二十五年余を経た今日なされているだろうか。感情的な肯定と安直な歴史観に基づく否定という評価から離れて、西欧文化・文学の受容の一つのケーススタディとして、近代文学史に果たした役割を位置付けることが、本論文の目的である」と記している。かなり気負っているが、三十余年前に考えたことは、横光の近代文学史における復権をめざしたの

ではなく、私が生まれて、今も生き、（すでに平成の時代にはいっているが）、昭和という時代、そしてこの時代に生きた横光の歩みを自分なりに考えてみたかったのである。

論文計画にしたがい、当時上智大学大学院文学研究科国文学専攻では、博士過程を三年間で単位取得し、正式に退学するためには、博士過程単位取得研究論文を提出することが義務付けられていた。このために数本の論文をまとめた。これらは『横光利一－比較文学的研究』として、笹淵友一先生に「序文」をいただき、一九八〇年に上梓した。これより以前の昭和四十八年に母校上智大学国文学会『国文学論集』（第七巻）に「『日輪』とSalammbô－長江訳『サラムボオ』との関連において」という論文を発表した。内容としては、横光のいわゆる、新感覚文体は長江訳『サラムボオ』の文体のじつに細やかな模倣であることなど、すでに指摘されていることであるが、原文、英訳、現代の専門家の翻訳をならべて、いかに長江訳が特徴的であるか、それに横光が工夫を重ねつつ、自分本来の文体から脱却しながら、「国語との不逞極る血戦」をいどみ、書き続けていったかなど、実証した。この論文について、掲載された『国文学論集』を故保昌正夫先生にお送りしたところ、ご自分の大学の大学院の演習のテクストにしてくださるといわれて、論集などでは珍しいことなそうであるが、はやくから売り切れとなり、のちに私自身に求められた時には、国文科研究事務室にもない状況となったのは、うれしいことであった。

一九八〇年の前著では、『論集』では大幅にカットした部分もすべて、いれることができたし、若き日の横光が愛読したキーランドの影響についても、キーランドについて文献も少なく、ノルウェー語から学びはじめたり、英語圏の資料にたよるなどして、かなり跡付けることができたと自負している。その上に立った、「『春は馬車に乗って』の構造論」論もくわえることができた。安川定男先生が『解釈と鑑賞』（二〇〇〇年2月、65－6号）の『春は馬車に乗って』論中で拙論を「参照のこと」と明記してくださったことは、公刊して長い時をへだてた後であったので、研究論文の行方を思い、感無量であった。

『横光利一―比較文学的研究』では、そのタイトル通りに主として、フランス派の受容・影響研究が占めたが、一篇のみ例外があった。それは『上海』論であった。この作品では、ヨーロッパの作家のある作品の影響というよりも、横光の海外体験、すなわちかれの中国体験によって生まれたものである。少々、時代は異なるけれども、同じように東アジア体験によって、作品がかかれたアンドレ・マルローの作品と対比する方法で考えた。マルローの東アジアに対するヒューマニズム、そういう状況を生み出したヨーロッパの若者の反応など、『上海』を考える中で、当時の横光や日本国内の知識人の思考・植民地政策・植民地の現状など、世界史的文脈で方向付ける読み方に導かれていくことができて、研究の拡がりの必要性を感じた。

公刊することができた、第二作は『横光利一―比較文化的研究―』である。「目次」を紹介すると、次のとおりである。

第1章　横光利一と外国文学
第2章　「日輪」とSalammbô―長江訳『サラムボオ』との関連において
第3章　「赤い着物」論―ポーとのかかわりにおいて―
第4章　『家族会議』試論―経済性と道徳性
第5章　「新小説論」エドウイン・ミュアとの関連において
第6章　『旅愁』とその時代―二・二六事件とスペイン内戦をめぐって
第7章　日本回帰―横光利一の場合
第8章　写真からの再生―「罌粟の中」試論
第9章　横光利一の描いた女性たち

第10章　ドストエフスキーの読み方－横光利一の場合
第11章　横光利一における自然－『夜の靴』まで－

私が横光利一の比較文学的研究を試みた頃から思うと、日本の知的状況がかなり変化して、『横光利一の文学と生涯－没後三十年記念集』（由良哲次編、昭和52年、桜楓社）中の論文やエッセイなどにもうかがわれる。ようやく、『定本横光利一全集』全十六巻がでたのは昭和五十六年六月からである。『定本』により、再び横光が言及している外国作家・思想家等の頻度数調査をおこない、改めて第1章「横光利一と外国文学」の基礎研究が可能となった。第5章のエドウイン・ミュアとの関連については、ひとえに『定本』出版の恩恵によっている。拙論中に述べたけれども、横光が論じたとされている『新文芸思想講座』は横光自身の手に依るものではないという見方が強い、といわれている、とのことである。しかし、そうなると、他のエッセイ等も横光の手によるものではないということにもなる。拙論では、確実に横光が書いた作とされているエッセイと重複しているものから推論して、エドウイン・ミュアが紹介されはじめた同人誌的西欧文学研究誌『詩と詩論』と横光との密な関係から、仮説をたてて、論をすすめることとしたつもりである。故中村真一郎のお話によると、横光ほど、若い学生たちにさえ、同時代のフランスやイギリス文学の状況について、真摯に、謙虚に問いかけ、知識をえたがった作家はいなかった、という。

第2章は拙著の末尾の「あとがき」に明記したように、母校の『国文学論集』（第七巻、昭和四十八年）に掲載したもの、そのままを収めた。先述したように、この論集は完売され、もっと詳細に論述した前著『横光利一－比較文学的研究－』も重版ならず、もはや古書店でも手に入りがたく、私にとっては先輩にあたる方から、直接ご注文を戴いても手許になく、心苦しい年月を経てきた。本当は前著と同じもののまま、フロベールのSalammbô研究から出発した、長い数章をそのまま再掲載したかったのであるが、出版上の制限枚数等々の都合により、要点をま

とめた『国文学論集』の初出のまゝのものにした。私の横光利一についての比較研究の道の第一歩を再現したかったからである。

習作時代の横光利一はひたすら、当時の文壇的文学を模倣していたが、新感覚派を志してからは、それまでに読みふけっていた翻訳による外国文学の強い影響下に、新しい創造を試みていることは、拙論において、実証してきた。

翻訳によらずに、横光が原語で味わえた外国作家はエドガー・アラン・ポーである。卒業はかなわず中退に終わったけれども、早稲田大学の英文科に籍をおき、友人とポーを熱心に読書した結果が作品化されている。新感覚文体となって結晶化する文体誕生のエキスは、英語から日本語に読みかえるというか、理解する瞬間に、生じたのではないかという、想像をしている。仮説をたて実証するには、今の私には力及ばずである。新感覚文体には、全くの仮論であるが、俳句文法的要素もみられて、興味深い。句作を多くものしている横光と俳句については、古くから語られていることであるが、今後の自分への課題として、考えたい。

私にとって、横光利一は『旅愁』の作家ではじまり、今も読み切れていない課題が残されている。『旅愁』は文学作品であるが、ひとり文学の問題としてのみでは、全体をつかむことはできない。この作品はそもそも日本内部にとどまらないことは今更いうまでもない。描かれている事柄・世界・対象など、すべてが国際的視野・学際的視点をもっている。必然的に世界文化史的観点が要求されるのである。中学生の幼い関心をそそったのは、戦後の価値判断のまったく転換したことに対する私の疑問だったのかもしれない。

『旅愁』論は私の思考のなかで、終わったわけではなく、まだまだいくつものテーマが残されている。私の共同研究者の故マイナー教授は、従来の比較文学研究の受容・影響研究のほかに、Cross Culture Study「交流文化研究」ということを一九七〇年代からいい続けられていて、この数年アカデミズムの世界だけでなく、「異文化交流」な

ど教育レヴェルでも一般化している。「文化研究（カルチュラルスタディズ）」と「文学研究」の対立とか、どちらかの優位性という方向を前もって、決めて作品研究にあたるのではなく、作家が言語を用いて、文章化したものが、作品であるという、自明の、ごく素直で、自然な読み方で作品にあたりたい。福永先生の講義により「比較文学研究」の世界に目が開かれた私ではあるが、横光利一研究に即して、振り返ってみると、はじめに「比較文学的研究」ありきではなく、横光利一が直面した、ヨーロッパ文学・文化と、近代日本が経験した、西欧文化との交流に〝What, How, Who, why〟という、具体的関心であったと、今考えている。そして、これからも辿ることになるであろう。

母校での博士課程単位取得後、母校で講師として、全学部・学科（神学科から物理専攻）向けの「文学」担当講師として、採用頂いた後、プリンストン大学でResearch Fellowとして、日々「異文化交流」を生活感覚上でも、知的レヴェルでも認知しながら充実した一年を過ごした。在米中にお話をいただき、帰国後、すぐ国学院大学日本文化研究所で専任研究員としてプロジェクト研究に携わりながら、同時に文学部兼担として、「比較文学」を講義した。この後本学でも、はじめは短大英語科で、比較文学を担当した。大学人文学部と、大学院でも現在、リーディングとセミナーを兼ねた形式で授業を行なっている。一九八五年に始まった私の本学院における授業であるが、短大英語科の最多数の学生をかかえこんだ一九八五年からの数年は二百余名の受講学生がいた。改組以来（現在の現代文化学科・表現学科）少なくなったのであるが、数十名の学生諸君が熱心に積極的に受講している。文学に対する学生の関心が薄れてきていることは事実であるが、比較文学・比較文科研究に対する関心の根は確実に着実に、拡がりつつ成長していることを日々、実感している。半世紀前に、優れた師によって、開かれた世界「比較文学・比較文化」を福岡女学院大学でも伝えられていることの喜びを深く、知覚しながら去る日を迎えたい。

註

① ポール・ヴァン・ティーゲム『比較文学』富田仁訳　清水弘文堂　昭和48年

② 滝口明子『英国紅茶論争』講談社選書メチエ　一九九六年

③ 与謝野晶子『晶子古典鑑賞』〔与謝野晶子選集4〕春秋社、昭和42年

④ 阿部良雄訳著『ボードレール集・悪の華』筑摩書房　一九八四年